



奥山保全で水を守れ

時論

ジャーナリスト・著述家

橋本 淳司

緑豊かな地方の山村で水涸れが起きている。宮崎県北郷町（現日南市）で数年前、沢から水が消えた。沢水に頼った稲作は、農業用水を利用せざるをえなくなった。高知県大豊町では、湧き水に頼っていた住民から「水が涸れた」という訴えが相次いだ。二〇〇〇年頃から湧き水の量が減り、水道を引かざるを得なくなった。どちらの町の関係者も、戦後の拡大造林政策で植林されたスギやヒノキが間伐されず放置され、山の保水能力が弱くなったためと考える。

放置された人工林は昼でも暗い。下草のない地面に、やせ細ったスギ、ヒノキが鉛筆のように立っている。下草があれば秋に涸れて新たな土となる。しかし、それがない。雨が降るたび土粒の間隔が狭くなり、コンクリートのように固くなる。こうした土は保水力がない。

昨年十一月、奥山水源の森の保全・再生を目指す超党派の議員連盟が設立された。

かつての日本人は、里山は循環的に利用し、奥山には手をつけなかった。里山では、自然の森の木を切り、植林などにより樹種転換を行い、荒れないよう手を入れ続けた。一方、奥山は、大型野生鳥獣たちの聖域として残したことで、原生的な巨木の森が保全された。この原生的な森から水が湧き出し、生物の命

と産業を支えてきた。

しかし戦後、国の主導で行われた拡大造林政策によって、保全されていた奥山の広葉樹林は伐採され、スギ・ヒノキなどの単一針葉樹だけが植え続けられた。現在これら造林地の多くは、国内林業の不振によって放置され、荒廃の一途をたどっている。そして荒廃した人工林が保水力を失ったため、各地で湧き水、井戸水の枯渇、川の水位の低下、山崩れ、洪水などの災害が起きている。さらに野生鳥獣がえさ場とすみかを失ったため、クマやシカなどが山から出て来ては農作物被害を起す。「奥山水源の森 保全・再生議員連盟」は、水源・野生鳥獣の生息地として自然の森の保全・再生の方針を立て、野生鳥獣と共存するための政策を立案し、実行体制の構築を図る。具体的には山の利用方法を抜本的に見直す。中腹から上は手をつけず保全し、中腹から下で循環型の林業を行う。そのことが私たちにとって無くてはならない「命の水」を守ることにつながる。

はしもと・じゅんじ「水」という視点で社会を見た作品を多数執筆。近著に「日本の水がなくなる日」（主婦の友社）。現在、東京学芸大学客員准教授 日本水フォーラム節水リーダー。